

幹事・世話人からのメッセージ

代表幹事 原田 昌範

山口県立総合医療センター へき地医療支援センター長

このたび代表幹事を務めさせていただくことになりました。今回のテーマである「偏り(かたより)」は、へき地医療支援に携わっているものとして非常に興味深く、今から大変ワクワクしています。今回から会場が新しい場所に移りますが、これまでの15回の伝統をしっかり受け継ぎつつ、新時代最初のワークショップが、皆さまにとっての「出会い」や「気づき」そして「新たな出発(行動)」のきっかけになることを心より願っています。基調講演も期待していただください。当日皆さまにお会いできることを楽しみにしています。

幹事 高橋 美佐子

朝日新聞 文化くらし報道部 生活グループ記者

「ニュースとは、犬が人間を噛むのではなく、人間が犬を噛むこと」。全国紙記者の私がかつては昔の駆け出し時代、業界の先輩に教わった言葉だ。フツな日常における尖った部分や大勢と違う人を探して字にしる、という。この作業こそが一番しんどいと悩みながら、私は今も記事を書いている。というのも大前提である「平均」のようなものを正確に捉えない限り、何が異質なのかが見えてこないからだ。今回のテーマは「偏り」。医療界が直面する課題にとどまらず、思考回路を限りなく柔らかくして私自身も臨みたいと思います。よろしく願います。

幹事 山崎 元靖

済生会横浜市東部病院 救命救急センター長

医療界で「偏り」と言うと、ネガティブな意味で用いられがちです。救急医療に身を置く自分も、医師の時間的・空間的偏在、診療科間の偏在などが、直ぐに思いつきます。働き方改革で、年間時間外労働の上限が1860時間の医師と960時間の医師がいるのは何故?と、思うことも屡々です。

でも「偏り」は必ずしもネガティブだけではなく、ポジティブな意味も含有する言葉のほうです。「偏り」は解消すべきものではなく、むしろ敢えて作るべきものであるとしたならば、ヘルスリサーチが、その「偏り」にきつと意味を与えてくれるでしょう。

幹事 石堂 民栄

チームグクルLLC 代表社員/保健師

「偏り」が多少あっても、それをうまく調整していこうとバランスをとり、日常を過ごしていることが多いと思います。しかし、大きな「偏り」に対しては、どのように調整していけばいいのか、考え、行動し、調整しようと動くこととなります。

どうあれば、豊かに生きること、自分らしく生きることにつながっていくのか。この2日間、わくわく、ドキドキしながら、みなさんと元氣交流できることを楽しみにしています。よろしく願います。

世話人 永森 志織

NPO 法人難病支援ネット・ジャパン 理事

私は難病の当事者として、また専門職として難病患者の支援をしております。「偏り」と聞いてすぐに思いついたのは専門医の偏在でした。自分が住む県に自分の病気の専門医が何人いるのか。患者会では一番の関心事です。病気による差別や偏見、先入観なども偏りの一つでしょう。

患者になってすぐの頃には自分の病気の治療だけを考えていた

人も、患者会やピアサポート活動をする中で、社会全体の医療について考えるようになっていきます。一度偏った側に身を置いたからこそ、全体を俯瞰する際に見えてくるものがあるのかもしれない。

参加者のみなさん、自分が何に偏っているのかを意識しながら、異なる立場の方々と議論をし、深く考え、2日間存分に楽しんでください!

世話人 山岡 淳

神戸大学経済学研究科・経済学部 准教授

現代国家の施政者は効率と公平のトレードオフに頭を悩ませています。たしかに国民全員は等しく人権を有するものの、同様のサービスを提供するには、お金も人も足りないのです。結果的に、より多くの人に効率的にサービスを提供しようとすると、人の集まっているところを選ぶわけです。しかし、技術の進歩はすごいですね。偏っていても、通信技術の進歩により、遠隔医療等の提供できるサービスはだいぶ増えました。しかし、それで偏りの問題は解消できるのでしょうか?新時代に新会場で皆様と議論できることに楽しみにしています。

世話人 中山 俊

アンター株式会社 代表取締役/翠明会山王病院 整形外科医

今回から世話人となりました中山です。近年社会問題として取り上げられるようになった医師不足や医師の偏在、医療水準の地域格差。しかし、時間軸で考えると確実に多くの方々は良い医療を享受しています。時代の変遷にともない生まれた、かたより(偏り)。立場や環境によって、かたより(偏り)に対する想いはそれぞれあるのではないのでしょうか。このテーマを様々な立場から、様々な視点で議論できることを楽しみにしています。ヘルスリサーチと共に、かたより(偏り)の先に見える何かを感じられること期待しています。

世話人 池田 誠

SMP Laboratories Japan Co.,LTD. Vice President

世話人のひとりとして再び混ぜていただくことになりました。どうぞ宜しくお願い致します。

私の現在の仕事は「標準化」を如何にするかをクライアントの方々に対して提供しています。リスク評価を行い、そのリスクに対する対応策を洗い出し、人・モノ・コスト・情報・時間などを考慮して優先順位をつけ手順書を作り、PDCAを実行していきます。

しかしながら最初は頑張るんだけど、殆どが形骸化してうまくいけなくなります。そう、「偏り」がでてくるからなのです。今回より立場は変わりますが、皆様とまた一緒に「もやもや」したいと思います。

世話人 花木 奈央

大阪大学大学院医学研究科 公衆衛生学 特任助教

「偏り」と聞いて何を思い浮かべられましたか?果たしてそれは本当に偏りがあるのでしょうか。偏りという発想の前提には比較対象となる「偏っていない状況」がありますが、それには主観が大いに影響します。均質化されがちな日常ではこの偏りに気づかないかもしれません。ワークショップを通じて多様な考えと出会い、自分の中の偏りに気づけることに期待しています。

(敬称略)